

## 4-1-5-1 消化器科

### 1. 概略

国立成育医療センター消化器科は、香坂 隆夫、田川 学、肥沼 幸が、常勤、レジデントとして勤務し、内視鏡科の林 篤医長の全面的な協力のもとに、消化管、肝、腎、免疫疾患と幅広い疾患の治療にあたっている。国立小児病院時代からの患者様と、北は青森から西は浜松までの広い範囲での紹介患者様についての診療にあたっている。外来は月 200 名強で維持しており、大きな変動はなく、入院も 8 - 12 名の間で運用されている。

胆道閉鎖症、アラジール症候群などの胆汁うっ滞性肝疾患は全国でも最も多い例を経過観察しているが、長期的予後の改善に取り組み、長期的な視野に立って治療方針をたてることを目的としている。

肝炎および肝障害に伴う全身性疾患、腎疾患、若年関節リウマチや血球貪食症候群の例も重症例が多い。このような例では免疫学的機序も重要となり、免疫抑制剤の投与、血漿交換 - パルス療法などを積極的に行なってきた。肝疾患では、C 型肝炎の治療でのインターフェロン投与の有効率が 6 - 7 割に届いており、今後もこの強化プロトコールに沿った治療を続ける予定である。腸疾患では炎症性腸疾患が主な疾患であるが、近年その治療方法は大きく変わりつつあり、免疫抑制剤、白血球除去療法を組み合わせたノンステロイド療法も一つの治療方法として行なっている。

またアレルギー性腸症、過敏性腸症、便秘、食欲不振などの生活習慣病を食事の心、知能、性格に対する作用と考え、ペプチドの脳への作用、腸 - 脳相関として、児の病気を生活全体の問題として考え、治療にあたっている。

### 2. 疾病の治療

#### 2.1 消化管疾患

当院開設以来、炎症性腸疾患では潰瘍性大腸炎初発 5 例、クローン病初発 1 例を入院加療している。ステロイド療法により速やかな寛解導入を認めている。クローン病も栄養療法と薬物療法の併用で寛解導入を認めている。両疾患とも寛解維持には工夫が必要とされ、副作用が少なく長期間に寛解を維持するための方法として、免疫抑制療法を積極的に活用している。維持療法として白血球除去療法も応用しているが、経過は良好である。

炎症性腸疾患以外では、食欲不振、慢性下痢、嘔吐、胃食道逆流、過敏性腸症など、腸 - 脳相関を示す患者の入院が増えている。これらの症例はこころの診療部の適切な治療、とくに家族の指導を含めた相談や、栄養療法や薬物療法で改善している。

#### 2.2 肝臓疾患

新生児肝炎と胆道閉鎖におけるサイトメガロウイルスの発症機序におよぼす影響について検討を続けている。C 型肝炎では 5 例に PEG インターフェロン単独ないしはリバビリン - インターフェロン治療を導入した。5 例は RNA が陰性化したが、再燃は 1 例に認められた。長期予後は現在経過観察中である。他の肝疾患では、非肝炎ウイルス性肝炎、肝硬変、肝腫瘍、硬化性胆管炎、全身性疾患に伴う肝障害（若年関節リウマチ、急性白血病）について治療をおこなった。

胆道閉鎖症診断例は 3 例あり、当院で外科治療を受け経過は順調である。サイトメガロウイルス感染合併を示唆するデータが得られ、胆道閉鎖症の成因を考える上で興味深い。長期経過観察患者は胆管炎合併や食道静脈瘤処置で入院となっている。肝移植後のサイトメガロウイルス感染症は拒絶なく治癒した。成人となり、無事出産を終えた例も 5 例経験した。

#### 2.3 腎疾患

国立小児病院腎消化器科時代から通院中の腎疾患患者のうち FGS、IgA 腎症の増悪、先天性腎奇形に

よる透析導入のために延べ12例が入院した。腎炎の患者の経過は10年を経過した例が多いが、MPGN 経験例は24例で、すべて寛解状態にある。とくにステロイドに対する反応の悪いMPGNには血漿交換パルス療法を施行し、14例全例が蛋白尿消失、治癒状態を維持している。ネフローゼも100例以上の症例のうちで、ステロイドに反応した例は、3例のFGS例を除き、全例が寛解状態であり、8例はなおCyAを服用しているが、蛋白尿持続例は1例のみである。膜性腎症は22例で3例が腎不全に移行したが、残りは寛解状態にあり、蛋白尿持続例は1例のみである。IgA腎症、HSPGNの蛋白尿の断続的出現ないし持続例は102例中15例であり、これらの例はステロイド、免疫抑制剤などでコントロールしているが、なかなか決め手となる治療はない。国立小児病院時代に2例の腎不全例を経験したが、幸いなことに血漿交換パルス療法施行後の腎不全移行例は経験していない。

入院の目的は昨年は血液透析、腹膜透析導入、UC、HPSの肝障害増悪、など緊急なものが多かったが、現在は経皮的腎生検やインターフェロン療法など検査、治療のための入院が主となっている。